

2023 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 氏名 山岡 真悠子

〈 研修概要 〉

2 月 25 日から 3 月 6 日までベトナム研修に参加し、チョーライ病院・タンアン病院・フエ医科薬科大学で研修を受けました。チョーライ病院とタンアン病院では臨床研修、フエ医科薬科大学では学生との国際交流や文化交流を行いました。

〈 研修参加の目的 〉

異国での病院研修は貴重な経験です。日本と異国の病院を比較して双方の特長を知れば、自分のしたいことや働きたい場所が明確になると考えました。ベトナムと日本の病院の共通点と相違点を学び、就職活動や将来の生き方に活かしたいと思い本研修に参加しました。また、昨夏に本学でフエ医科薬科大学の学生と交流する機会がありましたが、彼らの英語をほとんど聞き取れず翻訳機を使用して会話しました。より多くの外国の方と深く交流するために本研修で毎日英語に触れ、語彙力を高めたいと考えました。さらに、診療放射線技師に必要なスキルを学び、そのスキルを養うために今自分にできることを考える貴重な機会であると考えました。本研修を通して自分を内省し、今の自分に足りない事を見つけて人間的に成長したいと思い、本研修に参加しました。

〈 研修で学んだこと 〉

・チョーライ病院

チョーライ病院は日本の政府開発援助（ODA: official development assistance）で建設されたベトナム南部最大の医療機関です。病院に対する最初の印象は、患者数が非常に多いことです。待合室には患者が溢れ、廊下や病院の外にも多くの患者が座っていました。日本よりも少ない検査機器数で 1 日数百件以上の CT や MRI の検査に対応していました。そのため、少しでも検査効率を向上させるために静脈ルートを検査の数十分前には確保する工夫がある一方で、金属類や入れ歯を装着した状態で検査する妥協も見受けられました。もともと検査機器数が少ないにも関わらず、機器が故障しているモダリティもありました。しかし、患者数は変わらないため、上記で述べた工夫や妥協に加え、スタッフのチームワークによって回転率を維持していることを学びました。できる限り多くの患者を撮影するために検査効率を重視し、時間を要する高画質な画像ではなく、診断に及第点の画質で撮影していることを学びました。さらに、ベトナムでは線量計の集計が半年に 1 回であることを知りました。チョーライ病院では検査室のドアを閉めずに曝射したり、次の患者が検査室内で待機していたりと、日本ではあり得ない状況で検査が進められていました。しかし、さらに、患者数が多いにも関わらず、CT のスタッフは線量

計を付けていませんでした。日本では線量計は月に1回集計され、厳格に被曝管理していますが、ベトナムでは被曝管理を重要視していないことを学び、日本との違いに驚きました。

・タンアン病院

タンアン病院の院内はチョーライ病院よりも清潔に保たれており、最先端の機器が揃っていました。タンアン病院では一般撮影を見学しました。チョーライ病院と同様にタンアン病院でもネックレスは外さずに口にくわえて胸部を撮影していました。タンアン病院の研修では、透視せずに子宮卵管造影検査を行っていたことが最も印象に残っています。日本では一般的に、この検査はX線透視下で実施します。非透視下で造影剤を注入するために撮影タイミングが難しく、チームワークが重要だと学びました。造影剤を注入する医師と曝射する診療放射線技師の息が合わないと撮り直しになりますが、研修時は1度の撮影で検査が終了しました。同じ検査でも撮影方法が複数あることを知り、自分の知識不足と勉学に励む必要性を痛感しました。

病院見学後はタンアン病院の先生方とお話する機会がありました。私はこのような場で発言する勇気がなく、ただ座って話を聞いているだけでした。タンアン病院について説明していただいた時にただ聞いているだけではなく、疑問を持つことが大切だと学びました。何事にも疑問を持つ習慣があれば、普段から先生や友人に質問する機会が増え、このような場でも質問する勇気生まれ発言できるようになると思いました。今後、病院実習やプレゼンテーションに対する質疑応答の場面では、自分の意見を発言できるようになりたいです。

・フエ医科薬科大学（附属病院）

フエ市の研修ではフエ医科薬科大学の学生と交流し、フエ医科薬科大学附属病院で研修を受けました。歓迎交流会ではフエ医科薬科大学の学生がダンスや歌を披露してくれ、私たちは“よっちょれ”というダンスを披露しました。私はフエ医科薬科大学で日本文化について英語でプレゼンテーションしましたが、200人以上の聴衆の前で初めてスピーチしたためとても緊張しました。しかし、私たちのプレゼンテーションやダンスが終わった後には多くの学生が話しかけてくれて先方の学生と仲良くなれました。この経験から、プレゼンテーションは覚えた内容をただ話すのではなく、相手に伝えようとする気持ちが大切だと学びました。流暢に話すことも大切ですが、分かりやすく伝えるためにはジェスチャーや声の強弱をつけることが効果的であると学びました。

フエ医科薬科大学附属病院では、どのモダリティもフエ医科薬科大学の学生が中心となり、CT撮影のポジショニング、患者情報の入力、検像をスムーズに行っていました。CT検査では私と同じ歳の学生が手際よく静脈ルートを確認し素早くポジショニングしている姿を目の当たりにし、このまま就職しても自分は臨床で役に立たないと気付き、一層勉学に励む必要性を感じました。日本はベトナムよりも臨床実習期間が短いため、密度が重要だと思います。臨床実習を充実させるために既習事項を復習し、事前に基礎知識を増やしたいと思いました。

ベトナムではバイクが主な交通手段であり、フエ医科薬科大学の学生もバイクで登下校しています。彼らは私たちをバイクに乗せ、昼食や観光に連れていってくれました。私はバイクに乗る機会がほとんどないためとても貴重な体験でした。実際に乗るまでは恐怖心がありましたが、安全運転だったため安心して乗ることができて本当に楽しかったです。また、フエ医科薬科大学の学生は友好的で、パーティーでは自ら歌い盛り上げてくれました。

3日間という短い時間でしたが多くの交流ができてベトナムをさらに好きになりました。機会があればベトナムに行き、さらに親交を深めたいです。

・日本とベトナムの違い

日本とベトナムの違いで一番驚いたことはバイクの交通量です。日本ではバイクよりも車の交通量が多いですが、ベトナムでは圧倒的にバイクの交通量の方が多いです。また、信号や横断歩道がない場所が多く、歩行者はタイミングをみて道路を渡る必要があります。また、バイクの排気ガスで空気が汚れているために、バイクに乗る人だけでなく歩行者もマスクをしていました。

日本とは異なり、チョーライ病院では治療費の未払いを避けるために先払い制でした。当然だと思っていた日本の制度がベトナムでは当たり前ではなく、国による医療制度の違いを学びました。

さらに、病院実習期間の違いが印象的でした。本学は2年生で2週間、4年生で2か月間の臨床実習を受けるのに対し、ベトナムでは2年間も臨床実習を受けます。ベトナムでは臨床実習中に静脈ルートの留置方法、ポジショニング、装置の操作を学びます。ベトナムでは国家試験がないため、長期間の病院実習によって臨床業務に必要な能力を体に覚えさせているのだと学びました。日本は臨床実習が短いため、ポジショニングや患者接遇の経験が浅いまま就職する不安があります。一方で、臨床実習が短い分は講義や実験で撮像原理などについて深く学べる利点があると思います。自分の環境の特長を自分の成長に活かしたいと思いました。

〈まとめ〉

本研修の参加を通し、今の自分と今後の自分について深く考えることができました。今の自分には診療放射線技師として患者の命に向き合うための知識が圧倒的に足りていないと感じ、より一層勉学に励みたいと思いました。どの国にも治療を必要とする沢山の患者がいます。私は世界中の患者を助けられる診療放射線技師になりたいです。また、本研修での経験から、他国を知りたい気持ちがより強くなりました。機会があれば未訪問の国に行き、現地の人と交流し、その国について学びたいと考えています。これからも本研修に参加した仲間と切磋琢磨し、共に成長したいです。

〈謝辞〉

海外研修に参加することを承諾し支援してくれた両親、今回のベトナム海外研修に引率して下さった松尾先生、水田先生、霜村先生、石田先生、研修でお世話になったチョーライ病院、タンアン病院、フエ医科薬科大学の先生や学生、研修のサポートをしてくださった本学職員の方々に深く感謝いたします。



チョーライ病院研修



タンアン病院研修



フエ医科薬科大学との交流



ホーチミン市の街並み